言語生活

米川明彦

一、社会言語学史の第三のエポック

今期、真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹『社会言語学』（桜楓社、'93）が出版されたことは注目すべきことである。本書の第一章で日本における社会言語学史が略述されているが、その中で、第一のエポックは一九五一年の『言語生活の実態――白河市および附近の農村における――』の刊行とし、第二のエポックを一九七一年の『待遇表現の実態――松江24時間調査資料から――』の刊行としている。また、まえがきに「本書の出現はその第三のエポックを画するものとなりうるや否や」と述べている。私は本書が第三のエポックを画するとは今の時点では言えないが、今期（'92～'93）はおそらく社会言語学史の第三期に入るのではないだろうか。というのは本書の出版もさることながら、談話分析の展開を象徴するかのように二書が出版され、さらにまた、言語接触と対照二言語併用の研究を開拓した一書が出版されたからである。すなわち前者は泉子・K・メイナード『会話分析』（くろしお出版、'93）とポリー・ザトラウスキー『日本語の談話の構造分析――勧誘の談話のストラテジーの一考察――』（くろしお出版、'93）であり、後者は任栄哲『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』（くろしお出版、'93）である。なおこれらについては以下の章で触れることにする。

今期のこのような日本の社会言語学史の新たな段階は論文の数の多さだけではなく、精密さと新しい分野の開拓、及び日本語教育への応用という点でも言えることである。私はこの稿のために過去一年間に二、三百の論文・単行本を読んだであろう。その数の多さに驚く。しかし、もっと驚くことは次々に研究が深められ、質的に向上し、外国での研究であったものが日本での研究となって開拓されたことである。一時期の在来派・外来派の不必要な二分は過去のものとなった感がある。そして、さらに驚くべきことは日本語教育への応用の進展である。言語習得を社会言語学的視点から研究し、発展させたことである。特に談話研究の盛行は今期の一大特徴であるが、それを日本語教育の言語習得へ応用させた、またはそれを目ざしている研究が増大したことは特筆すべきことである。それを象徴するのが「コミュニケーション」と「ストラテジー」の流行である。そこで今期は「コミュニケーション研究の時代」とでも言えようか。

なお、変化の激しい現代日本社会はことばも激しく変化している。従来のように言語変化研究は盛んであり、細かくなってきている。

以下、先の『社会言語学』の分類にもとづきながら、今期の研究を展望する。

二、属性論

二・一　世代差・職階差・性差

この分野は方言の研究で盛んであり、近年社会学調査に見られるような統計的処理を行い、より精密な因子の相関関係を出して研究を前進させている。その中で、目についたのが半沢康「共通語使用行動の要因分析――福島県伊達郡桑折町における――」（『国語学』172、'93）と同「共通語使用行動に及ぼす職業の影響――福島県伊達郡桑折町における――」（東北大学文学部『国語学研究』32、'93）である。両者は同一の調査にもとづく同様の手段による分析である。観測された相関係数から因果のメカニズムとその影響力を求めたことは新しい知見であった。

年齢差と職階差を敬語行動の要因として研究したものに黄鴻信「職場における私的場面の敬語行動――職階差と年齢差を中心として――」（『東北大学文学部日本語学科論集』2、'93）がある。本稿は職場での敬語行動について、年齢が同一の層に属する相手に対する場合に限り、職階の上下関係が保たれるが、職階と年齢に食い違いがある場合、職階差よりも年齢差がもっと重視されることがわかった。これは従来、職階が職場の敬語行動を規定する大きな要因とされてきたことに対して、要因は決して単純なものではないことを語っている。

性差については佐藤高司「新方言の使用における男女差――群馬（及び栃木の一部）と高校二年生のアンケート調査から――」（『計量国語学』19-1、'93）は新方言を東京型と地方型に分けた場合、東京型の新方言は女性に使用されやすく、地方型の新方言は男性に使用されやすい傾向を見つけた。地域への地方型新方言の定着には女性若年層の使用が影響を与えていると言える。

近年、女性語研究が新しい展開を見せている。月刊誌『言語』（'92・6）の特集「現代言語学のトピックス」の一つに、阿部圭子「もう少しお切りになったらすてきですよ〈女性語研究の新しい切り口〉」がある。従来の女性語研究はことばの男女差を発話者が性別に結びつけて考えてきたが、新しい切り口は性差に代わる話し手の職業、社会的地位、能力の有無などの要因を加味した研究であり、文化の違いを加味した研究となっている。阿部は「言語と性差研究における理論の回顧と展望」（『ことばのモザイク　奥田夏子名誉教授古稀記念論文集』'92）で詳述している。また雑誌『日本語学』も臨時増刊号（'93・5）で「世界の女性語・日本の女性語」を取り上げ多くの興味深い論文を載せ、また研究史と研究文献目録を載せ、有益である。その他、遠藤織枝編『女性の呼び方大研究　ギャルからオバさんまで』（三省堂、'92）、福田真弓『「主人」ということば　女からみた男の呼び方』（明石書店、'93）、太田淑子「談話にみる性差の様相　終助詞を中心として」（『横浜国立大学教育紀要』32、'92）がある。女性語研究の社会言語学的な新しい切り口は今後の発展が大いに期待される。

二・二　集団語

今期、キャンパスことばの辞典が次々に刊行された。永瀬治郎が既に八九年に『専大生キャンパスことば事典（第一版）』を出しているが、その後『同（第三版）』（'93）が出され、米川明彦が月刊『言語』に連載していたもの（91・5～92・4）を『すきやねん若者語辞典――梅花女子大生のことば』（'93）として出し、また京都の高校生のことばを中

心にした高山勉『キャンパス用語集　第三版』('93)、都染直也『甲南大学キャンパスことば辞典』('92)、小矢野哲夫『女子大生用語の基礎知識』('93)が出た。これらの辞典を総合して、東西のキャンパスことばが一覧できる辞典ができるなら、もっと研究が進むであろう。

永瀬治郎「〝キャンパス言葉〟の造語法」(『専修国文』50、'93)で造語法を考察し、同「言語伝播における構成員の役割――大学のサークルの中で――」(東北大学『国語学研究』31、'92)でキャンパスことばの伝播には「打ち上げ花火型」と「線香花火型」があり、言語ボスのもつサークル内の社会的位置と関係があることを述べているのが注目される。その他、秋山胖・上杉喬「『はやりことば』に関する研究(1)――人間科学部学生の場合――」(『文教大学　言語と文化』4、'91)と「同(2)」(『同』5、'92)がある。

業界用語が世間一般に広まり、またその種類が増える状況で月刊『言語』(92・2)は特集「業界用語を読む」を組み、米川明彦「業界用語の造語法」、井上史雄「業界用語のアクセント――専門家アクセントの性格」を掲載して、業界用語を明らかにしている。しかしキャンパスことばにしても業界用語にしても研究はこれから本格化することが求められる。

三、言語行動論

三・一　言語行動の種類や姿

あいさつ行動は地域差・世代差があることは従来言われてきたことであるが、外国との対照研究は少なかった。今期、金英美「日・韓両国語におけるあいさつの比較――後傾性(過去言及)を中心に――」(『東北大学文学部日本語学科論集』2、'92)は、あいさつことばの過去言及は日本語に特有なものではなく、韓国語にも現われることを述べた。その他、沖裕子「談話型から見た喜びの表現―結婚のあいさつの地域差より」(『日本語学』93・1)がある。

ここ数年、国語教育界で話し合いの指導が重点的に行われている。その関係で『話し合い』(「ことば」シリーズ36、文化庁国語課、'92)、『日本語学』(93・4)の特集「話し合い」があった。話し合いの分析と話し合い教育の現状と改善点が取り上げられている。

言語行動の種類について、メタ言語的な言語表現類型について杉戸清樹「言語行動を説明する言語表現と丁寧さ」(東京都立大学『日本語研究』13、'92)、杉戸清樹・塚田実知代「言語行動を説明する言語表現――公的なあいさつの場合」(国立国語研究所『研究報告集』14、'93)は他に例がない論文である。

三・二　言語行動の構成要素

場面要素また人的要素と言語変種を扱った語の使い分け(切り替え・選択)の研究は盛んである。尾崎喜光「現代生活と方言――学校生活における方言と共通語の使い分け」(『日本語学』92・2)、井出祥子「日本人のウチ・ソト認知とわきまえの言語使用」(『言語』92・11)、木佐敬久「『結婚の儀』とテレビの皇室敬語――「場」による敬語の丁寧度」(『放送研究と調査』93・11)は方言と共通語、敬語の使い分けを扱った。井出は独自のもので、言語の普遍性とからめて今後の議論が期待される。一方、感謝表現、詫び表現の使い分けは外国の社会言語学者の焼き直し的なものが目につく。論文名は割愛する。

話しことばと書きことばの語句の使い分けについて遠藤織枝「話しことばと書きことば―その語彙的弁別の基準を考える」(お茶の水

女子大学『国文』77、'92）と同「話しことばと書きことば――その文体レベルでの異同を考える」（『東京大学留学生センター紀要』3、'93）は用いたデータがよかった。具体的な例が参考になる。

三・三　具体的な言語行動の内的構造・動的構造

今期、コミュニケーションの概念や機能の問題が改めて取り上げられ深められた。ウィリアム・S・ハウエル＆久米昭元『感性のコミュニケーション――対人融和のダイナミズムを探る』（大修館、'92）は対人コミュニケーションの理論と応用に感性がいかに重要な概念であるかを述べた好著である。

今期の最大の特徴は談話研究の進展である。先にあげた『会話分析』は対照会話分析を提唱し、その方法・手順・意義・応用を述べ、具体的に分析し記述している好著である。また『日本語の談話の構造分析』は著者自身が収集したデータをもとに勧誘を精密に分析したもので、これまたよい見本である。この期の談話研究の進展は『日本語学』の連載「語用論の現在と将来」（93・2～）にも現われている。

電話での会話分析は外国ではエスノメソドロジーによる研究が詳しいが、『日本語学』（92・9）は特集「電話」で現在の日本語の電話の会話分析の状況を明らかにしている。

会話管理のストラテジーに関する研究は盛んである。まず、あいづちや頭の動き、視線や笑いを扱ったものがある。外国人との対照を示し、日本人的なものを明らかにしようとしている。山田美樹「談話における非言語行動の一側面――首振り動作・視線と談話との関係について」（『阪大日本語研究』4、'92）、山田伸子「日本語の談話における『笑い』」（『東京大学留学生センター紀要』2、'92）、朴英新「コミュニケーションと視線の研究」（『応用言語学講座』4、明治書院、'92）、藤原真理「対話における相づち表現の考察「そうですか」「そうですね」等を中心に」（『東北大学文学部日本語学科論集』3、'93）などがあった。

詫び・依頼・断りなどの言語行動とストラテジーについての研究も盛んであった。『日本語学』（93・12）は特集「謝罪」を組み、熊谷智子「研究対象としての謝罪―いくつかの切り口について」をはじめ好論が掲載されている。熊谷は謝罪の研究の概要とこれからの研究の可能性を述べ参考になる。森山卓郎「関係修復のコミュニケーション　現代日本語のお礼とお詫びの定形表現」（『藤森ことば論集』清文堂、'92）や対照研究、堀江・インカピロム・プリヤー「『謝る』――日・タイの謝ることばと行動の比較」（国立国語研究所『研究報告集』14、'93）や熊取谷哲夫「発話行為対照分析の課題(1)――日英語の「詫び」の対照を例に」（『広島大学日本語教育学科紀要』2、'92）があった。依頼行動については熊井浩子「外国人の待遇行動の分析(1)依頼行動を中心にして」（『静岡大学教養部研究報告　人文・社会科学篇』28-1、'92）、同「(2)断り行動を中心にして」（『同』'93）があり、留学生の依頼行動と断り行動における談話行動及び表現上の不適切さの原因を権限の原則違反として説明している点が注目される。蒲谷宏・川口義一・坂本恵「依頼表現方略の分析と記述――待遇表現教育への応用に向けて」（『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』5、'93）は待遇表現教育への応用を考慮して、具体的な表現生成のためのストラテジーを提案しており、今後の日本語教育への応用が期待される。

会話展開の機能をもつ表現である談話標識（ディスコースマーカー）は英語の but などで研究されているが、それを日本語と対照させたものがある。川口容子「接続表現の機能に関する一考察――ディスコ

ースマーカー「but」「でも」の標するもの」（『日本女子大学紀要　文学部』41、'92）は「でも」に相手への配慮を示す機能があることを指摘している。椙本総子「会話構成単位と談話標識との関わり――「じゃ」を手がかりに」（大阪外国語大学日本語講座『日本語・日本文化研究』3、'93）は談話と発話との中間に新たに談話ユニットを設けることを提案している。

なお、茂呂雄二・小高京子「日本語談話研究の現状と展望」（国立国語研究所『研究報告集』14、'93）は題名の通り展望し、それぞれの研究が指向する方法論の違いを取り出している。また、研究文献目録を載せ有益である。

異文化コミュニケーションの問題も国際化と日本語教育の広がりと連動して盛んになってきた。『日本語学』（92・12）は特集「外国人とのコミュニケーション」を組んでいる。その他、紀要にもこの種の論文が多かった。

非言語行動、ノンバーバルコミュニケーションへの関心は年々高まっているが、まだ外国の先行研究の焼直し的なものが多い。『言語』（92・1）は特集「ボディ・ランゲージの世界」を組み、身振りや視線などの啓蒙的なエッセイを載せている。そのような中で、蓮花一己「交通空間での対人コミュニケーションの実験的研究」（『帝塚山大学教養学部紀要』31、'92）は車のクラクション言語を考察したユニークなものである。

ろう者の言語である手話については日本手話学会の発表以外に、米川明彦「手話の語彙と意味――有契性を中心に」（『日本手話研究所所報』11、'92）、本名信行・加藤三保子「『新しい手話Ⅰ』の造語に関する一考察」（『同』12、'93）があり、日本の手話研究者も十年前に比べ増え、質的な向上が見られるが、私が十年前に出した研究書以外にまだ研究書が出版されていない状況は悲しい。

四、言語生活研究

現代の生活に新しい機器が入ってきた。その代表がパソコンである。生活やコミュニケーションを変えるだけでなく、研究方法も変えるという大きな影響力をもつ。そこで、今期、これに関する特集や論考が多く目についた。『日本語学』は九一年九月号から「わたしのパソコン言語学」を二年以上にわたって連載した。そこに言語研究者とパソコンとの関わりを見ることができる。『翻訳の世界』（92・9）の特集「パソコンで翻訳がうまくなる」、『言語』（92・10）の特集「コンピュータの現在」、『現代のエスプリ』（306、'93）の特集「メディアコミュニケーション」、『情報科学と技術』（93・3）の特集「パソコン通信とヒューマンネットワーク」、『日本語学』（93・12）の特集「パソコン通信」、『日本語論』（93・12）の特集「情報化時代の日本語」と多い。パソコン通信というニューメディアにある伝達方式の長短、そのコミュニケーションのあり方、影響が多く論議されている。特集以外では、堀正「情報通信時代におけるパーソナル・コミュニケーション」（『群馬大学教養部紀要』26-2、'92）はダイヤルQ2、ファクシミリ、パソコン通信などのメディアを介したコミュニケーション行動の実態を明らかにしている。その他、倉元博美「パソコン通信の活用に関する学生の意識」（『鹿児島女子短期大学紀要』28、'93）がある。

ワープロの普及に関連して、吉村英「ワープロの文字と手書き文字の違いが文章の内容の評価に与える影響――論理的な文章の場合」（『京都女子大学教育学科紀要』33、'93）は現実的な問題を扱っている。

携帯電話については川浦康至「携帯・自動車電話とコミュニケーション空間」（『横浜市立大学論叢　人文科学系列』43-2、3、'92）がある。電話のかけ方の実態については荻野綱男「ある家庭の電話のかけ方の実態」（『日本語学』92・9）があり、珍しい言語生活研究となっている。

辞書も電子辞書が出回るようになり、『言語』（'93・5）は特集「辞書　新時代」を組んでいる。

カラオケも日常生活化し、コミュニケーションの場となっている。『現代のエスプリ』（312、'93）は特集「情報化と大衆文化　ビデオゲームとカラオケ」を組み、カラオケとコミュニケーション変容、カラオケと対人配慮の問題を扱っている。

この分野は全体的に見てあまり実証的とは言えず、問題の指摘や啓蒙的な解説にとどまり、日本人全体の新しい機器との関わりの研究はこれからと言える。

五、言語接触と言語変化研究

五・一　外来語

外来語の使用実態調査に大西勝也「『BSファッション情報』にみるカタカナ外来語の使用実態」（『放送研究と調査』93・12）があり、放送を通じての外来語についての研究の一層の発展が望まれるが、研究者が少なく、外来語研究の書も数年に一冊出る程度で、あまり期待できない。

干渉の問題については藤牧新「カタカナことばの英語学習への影響に関する一考察――Negative transferの一要因としての見方から」（『東海大学紀要　外国語教育センター』13、'92）や山田孝雄「日本人学生の書く英語の間違い　特に日本語の干渉によるもの」（『宮崎大学教育学部紀要　人文科学』71、'92）があった。

五・二　言語受容と地方共通語

移住とその土地の方言受容に関する研究は多くない。神鳥武彦「新興住宅地と方言――移住地方言との接触とその受容」（『日本語学』92・3）がある。

地方共通語については中井精一「関西共通語化の現状――大阪型待遇表現形式の伝播をめぐって」（『阪大日本語研究』4、'92）がある。なお地方共通語という術語に混乱があるためにダニエル・ロング「疑似標準語と地方共通語」（『大阪樟蔭女子大学論集』30、'93）で標準語と意識されている言語変種を「疑似標準語」と呼ぶことを提案している。

五・三　共通語化

標準語がマスメディアを通じ、地域方言に多大な影響を与え、変化させている現象を報告、研究するものはあいかわらず多い。『日本語学』は「方言の現在」を連載（92・1～12）、『日本語』（アルク、92・5）は特集「テレビが変えた日本語」を組み、『国文学　解釈と教材の研究』（93・11）は特集「日本語はどうなっていくのか」を組んでいる。その他、加藤和夫「石川県辰口町方言の動態――十年間の変化と世代差」（『金沢大学語学・文学研究』21、'92）や岸江信介「近畿方言の動態と分布との関連」（日本語学臨時増刊号『方言地図と文法――文法研究の地理的視界』'92）がある。

五・四　変化の全国調査

変化していく日本語を全国規模で調査しているのがNHK放送文化研究所の「言語環境調査」である。八六年から毎年実施され、現代日本人の言語生活の全体が少しずつ明らかになってきている。その第六回調査は「変わりゆく日本語」がテーマで、方言と標準語、外来語表記と発音などが取り上げられた。その結果報告（『放送研究と調査』92・4）があった。言語変化はその過程で「ゆれ」が見られる。発音・語法・表記・語形・意味のゆれの調査がなされた。大西勝也・最上勝也「あなたは『ニッポン』『ニホン』のどちらですか――〝ことばのゆれ〟実態調査から」（『放送研究と調査』93・8）、浅井真慧・安平美奈子「放送における『発音のゆれ』の変遷――現代の最も普通な発音による」（『NHK放送文化調査研究年報』37、'92）、丸田実・福田滋美「ことわざ・成句の形と意味のゆれ」（『放送研究と調査』93・7）は実態を明らかにし、貴重である。

五・五　二言語併用

国際化が進み、言語生活が二言語併用状況になることが増えてきている。任栄哲『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』は対照二言語併用研究を開拓した。彼らの言語生活について社会言語学的にデモグラフィックな属性と関連づけて分析し、実態を明らかにした好著である。他に阿部圭子「社会的ネットワークにもとづいた言語分析――オーストラリアにおける二言語併用の実態」（『言語』93・7）がある。

ろう者の多くは手話と日本語の二言語併用状況にあるが、今まで研究されていなかったが、今期、鳥越隆士、木村晴美「聾者の社会・言語調査予報」（『国立身体障害者リハビリテーションセンター研究紀要』13、'92）が研究の第一歩を踏み出した。

六、言語意識研究

六・一　方言意識

若年層における方言意識は上の世代と大きな違いが生じてきている。そこで方言や共通語にどんなイメージを抱いているかと研究がなされている。佐藤和之「津軽のことば・東京のことば―津軽方言話者のことばと地域のイメージ」（弘前大学文学部『文経論叢』27-3、人文学科篇XII、'92）、山県浩「高校生の方言行動・方言意識の諸相―群馬県北西部地域の場合」（『群馬大学教育学部紀要　人文社会科学編』41、'92）、同「高校進学に伴う方言行動・方言意識の変化相――群馬県北西部地域の場合」（群馬大学『語学と文学』28、'92）、梅光女学院大学方言研究会「下関市・北九州市高校生の言語意識と言語状況」（『梅光方言研究』9、'92）がある。

ガ行濁音がガ行鼻音にとって代わる現象について意識調査がいくつかされた。李殷芝「東京のある中・高校のガ行鼻音の実態及び教員の意識・意見について」（『東北大学文学部日本語学科論集』3、'93）、陣内正敬「地方におけるガ行鼻音意識――関西と九州における大学生アンケート調査より」（九州大学言語文化部『言語文化論究』3、'92）がある。

六・二　若者の言語意識と乱れ

九三年六月に国語審議会が「現代の国語をめぐる諸問題について」報告し、若者ことばの乱れを指摘している。NHK放送文化研究所は「若者とことば」アンケート調査を行い報告している。それは安平美奈子「若者と敬語―その意識と実態――〝若者とことば〟アンケート調

査から」（『放送研究と調査』93・10）、同「『団塊の世代』を知らないジュニアたち――〝若者とことば〟アンケート報告・第2回」（『同』93・11）である。後者は「ら抜きことば」の使用意識について報告している。

六・三　言語をめぐるアイデンティティー

言語主体のアイデンティティーが言語行動にどう関わるかという議論は従来あまりなされてこなかったが、今期『言語』（92・2）は特集「アイデンティティーとしての言語」を組み諸家の論文を掲載している。他に任栄哲「在外韓国人の意識構造及び言語意識」（『計量国語学』18-5、'92）がある。生まれながらのろう者の第一言語は手話であると全日本ろうあ連盟は主張し、聾学校において手話教育を要求しているが、これはこれからもっととり組むべき重要な課題である。

六・四　差別語

作家の差別用語使用に対する糾弾に反対する「断筆宣言」があってマスコミによる差別用語の議論が盛んになってきているが、言語研究者による本格的な研究はない。概説的なものに遠藤織枝「差別語・不快語の流れと今」（『国文学　解釈と教材の研究』93・11）がある。

七、言語習得研究

七・一　第一言語習得

幼児の言語習得は発達心理学で盛んであるが、第二言語習得と合わせて考えるとき、社会言語学的な視点からとらえ直す必要がある。今期、『言語』（92・4）が特集「子どもたちの言語獲得」を組んでいる。育児語（ベビートーク・マザーリース）の研究に村瀬俊樹・小椋たみ子・山下由紀恵「育児語の研究(1)動物名称に関する母親の使用語・子の月齢による違い」（『島根大学法文学部紀要　文学科編』17-1、'92）がある。

七・二　第二言語習得

今期の特徴の一つに日本語教育への応用研究の盛行がある。

前期、コミュニカティブ・アプローチが日本語教育の中に盛んにとり上げられたが、今期目についたのは川口義一「コミュニカティブ・アプローチの漢字指導」（『日本語教育』80、'93）と小川貴士「読みにおけるコミュニカティブアプローチについて――上級読解クラスの一試案」（『同』80、'93）である。前者は漢字、後者は読解に新しい指導を提案している。

学習(者)ストラテジーが盛んに研究された。ネウストプニーの講演録『日本語教育の場―習得の観点から』（お茶の水女子大学人文科学研究科日本言語文化専攻、'93）は学習者ストラテジーを詳しく紹介している。その他、伴紀子「言語学習のための学習ストラテジー」（『日本語研究と日本語教育』'92）、大橋敦夫・柳浦恭「学習ストラテジーと日本語教育　学習者に対する教師の役割」（『上田女子短期大学紀要』15、'92）坂巻延子・末田清「日本語学習者の学習ストラテジーに関する一考察」（『国際学レヴュー』4、'92）があるが、これらストラテジーの理論はまだまだ問題があり、これから進む領域である。

中間言語研究は日本語では緒についたばかりであるが、今期は一歩進み、研究が深まってきた。鎌田修「日本語の中間談話文法の一側面」（京都外国語大学留学生別科『日本語・日本文化研究』創刊号、'92）、同「日本語教育における中間文法」（『言語』93・5～94・4）、『日本語

教育』（81、'93）の特集「中間言語研究」所収の長友和彦「日本語の中間言語研究――概観」は日本の中間言語研究の問題点をあげ、参考文献をあげている。中間言語研究を第二言語習得研究に正しく位置づけるべきことが述べられている。長友以外に諸家の論文が並んでいる。訂正ストラテジー（コミュニケーションストラテジー）の研究についてもいくつかあるが、第二言語習得研究の中で、一般的な法則性を抽出することがこれからの課題であろう。ナカミズ・エレン「日本語学習者における依頼表現ストラテジーの使い分けを中心として」（大阪大学『待兼山論叢　日本学篇』26、'92）、尾崎明人「『聞き返し』のストラテジーと日本語教育」（『日本語研究と日本語教育』'92）などがある。誤用分析は日本では第二言語習得研究に正しく位置づけられていなかったが改善が見られるようになってきた。細川英雄「留学生日本語作文における格関係表示の誤用について」（『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』5、'93）は誤用領域設定と分析の方法を提案し、母語獲得と第二言語習得のメカニズムとの相互比較への可能性を開くものを考えている。趙南星「韓国人日本語学習者による外来語表記の誤り――日本語話者による評価を中心として」（『日本語教育』78、'92）と同「韓国人日本語学習者による漢字書き誤りの分析と評価」（『同』80、'93）は表記の誤りについて考察、指導法の改善を提示。フォリナートークの研究も中間言語研究の領域に入るが、これまた遅れている。その中でダニエル・ロング「対外国人言語行動の実態」（大阪樟蔭女子大学日本語研究センター『日本語研究センター報告』1、'92）、同「日本語によるコミュニケーション――日本語におけるフォリナー・トークを中心に」（『日本語学』92・12）は研究の基礎となる実態を明らかにしている。またフォリナートーク研究がどのようなことに貢献できるかについて述べている。その他、横山杉子「日本語における『日本人の日本人に対する断り』と『日本人のアメリカ人に対する断り』の比較――社会言語学のレベルでのフォリナートーク」（『日本語教育』81、'93）があった。この研究を通して言語接触の原理、接触言語成立の仕方が解明され、言語普遍論にまで発展できればよいのだが、今後の課題であろう。

日本語教育の教科書・教材はどんなシラバスにもとづくかによって決まる。従来の構造シラバスから機能シラバスへと移りつつある中で、具体的にどんな文をどんな順序で教えていくのかという議論が充分でなかった。澤田田津子「日本語教材における機能シラバスについて」（『奈良教育大学紀要（人文・社会）』41-1、'92）は総合的なシラバスを提案している。中川良雄「留学生の多様化と機能シラバス―日本語『している』文の発話機能」（京都外国語大学留学生別科『日本語・日本文化研究』創刊号、'92）は機能シラバスと構造シラバスとの複合化を試みている。

日本語教育が各地で行われるにしたがい、方言を教えるべきかどうかの議論が出てきた。『日本語教育』（76、'92）はこれを特集している。また国立国語研究所『方言と日本語教育』（日本語教育指導参考書30、'93）は有益である。

八、言語政策

八・一　国際化と日本語

国際化時代を迎え、これからの日本語のあるべき姿を考えるものとして『日本語学』（92・1）の特集「これからの日本語研究」や『日本語論』（創刊号、'93）の特集「日本語とはなにか」があった。

簡約日本語については野元菊雄「簡約日本語」（『文林』26、'92）と

国立国語研究所日本語教育センター第二研究室分室『簡約日本語の創成と教材開発に関する研究』('92)があった。

八・二　話しことば教育

文部省は話しことば教育の重視を新指導要領で唱えたために国語教育界では盛んに議論され、『月刊国語教育研究』(248、'92)、『実践国語研究』(16-9、'92)、『月刊国語教育』(12-7、'92)に特集が組まれた。しかし、言語研究としてはなかった。

八・三　手話教育

日本社会の中、特にろう教育界の中で、手話は充分な、ふさわしい地位を獲得していない現状で、言語としての手話をろう教育の中に取り入れることが近年盛んに論議されてきた。『MIMI』(59、'93)は「言語としての手話」の座談会(山田尚男・本名信行・米川明彦・伊東雋祐)を組んだ。また『日本手話研究所所報』はろう教育と手話に関する論を毎号掲載した(13〜15、'93)。これは九三年三月二十二日に文部省の委託機関が『聴覚障害児のコミュニケーション手段に関する調査研究協力者会議報告』を出し、ろう教育に手話を取り入れることを初めて、公に認めたことによる。

——梅花女子大学助教授——